

【あけまして南無阿弥陀仏】  
数年前に当寺院宛に届けられた年賀状の文面です。送り主は当院にも度々お越し下さっている大阪府・義本弘導先生です。そのまま浄土真宗の特徴が味わえる先生らしいお言葉だなあと感心した記憶があります。

さて、この年賀状ですが昨年末はいささか頭をかかえておりました。鹿児島の103歳の祖母が昨年4月に往生しております。大正元年生まれの祖母は、貧しく、そして目まぐるしく変化していた激動の時代に坊守として、実家のお寺を支えてくれておりました。祖母への感謝の気持ちが改めて湧き起こった年でした。年賀状に話題を戻しますと、身内が亡くなった場合、世間一般では年頭のあいさつを遠慮させていただく旨を喪中のお知らせと共に、年内中に送ることが常識となっておりますが、浄土真宗では「喪中」はないのです。しかし葉書を送る相手はそのことを知る方々だけではないことが、かなりの戸惑いとなりました。浄土真宗から外れずに、そして相手に不快感を与えないような

葉書を・・・

まず文章です。「喪」という文字はわざわざあらわす語ともいわれ、「喪中」には死ということ「わざわざい・けがれ」とみてゆく意味が含まれます。では、死ぬことは「わざわざい・けがれ」なののでしょうか？ここまで書くともうお気づきの方もいらっしゃるのではないかと思います。新鸞聖人にとって死ぬことは浄土往生=ブツダ(佛)に成ることです。そのことは弟子に当てたお手紙のお言葉の中にも『往生もめでたくしておはしまし候へ』としめされているように、悲しい中にも慶びを含んでおります。ですのであいさつには「喪」という「死をけがれ」とみる文字は使わず冒頭に『寿命無量』などの言葉を使います。そして文章も教義に沿う率直な思いを書いてゆきました。

さてもう一つ戸惑ったことが、葉書を出す時期です。浄土真宗の考えに基づきまずと通常通り年頭に出してもまったく問題ないのです。私もそうしようかと思っておりましたが、よく考えますと喪中・喪明けという考

えに乗っ取っていらっしゃる方にとっては理解に苦しむのではないかと思ひ直し、今回は文章内容を変え、12月と1月の2回に分けて送ることにしました。そんな事情がありここまで悩んだ年賀状は初めてでしたが、改めて浄土真宗の僧侶としての人生を歩ませていただいていることを実感できる出来事でもありました。そしてこの思いも、往生した祖母のはたらきかけの尊いご縁であると感謝しております。それではこの今年の年賀状の文面を皆様へのご挨拶とさせていただきます。

#### 光寿無量

昨年4月、祖母友岡千音が103歳で往生いたしました。祖母は戦中戦後の厳しい状況の中、自坊(妙蓮寺)の坊守として貧しいお寺を支えてきました。今年の新年は幼い頃見たお念仏を慶ぶ祖母の姿をしみじみ思い出しながら家族共々過ごしております。本年も何卒よろしく願い申し上げます。後になりましたが寒さが厳しくなる中どうぞご自愛ください。

称名

平成 28 年 元 旦 』